

## 『医師として人間として』

『先生、ありがとう。本当にありがとう。』

急性リンパ性白血病のFさんを看取った直後、息子さんは泣きながら私に抱きつき、何度もその言葉を繰り返した。私のこれまでの臨床経験の中で未だに忘れられない一コマである。

1987年秋。研修医の私が担当医となったFさんは、53歳の和裁教師で、既に抗がん剤に抵抗性となった厳しい状況の中にあった。担当となって数日後、コンコンと乾いた咳をしていることに気付き、胸部レントゲン検査を行ったところ、両方の肺全体に肺炎の影（スリガラス陰影）が出現し、私は愕然とした。写真からはカリニ肺炎という致死的な肺炎が強く疑われたのだ。

予想通り、即座に呼吸不全に陥り、大量の酸素投与を必要とすることとなった。Fさんと出会って、まだ数日というのに、既に会話すら難しい状態、いつ急変してもおかしくない状態となってしまったのだ。何とも言い知れない複雑な思いであった。

白血病の状態から考えて、人工呼吸器管理を装着するなどの積極的治療を行っても、回復の可能性は限りなく低いと考えられ、家族との十分な話し合いにより、ご本人に負担のかからない範囲で、できるだけのことをしよう、という方針となる。

その日から私は、毎日病院に寝泊りし、先輩医師・看護婦に教わり、また意見交換をしながら、1日に何回となく訪室する日々を送った。その時の私には重症患者を受け持つことによる不安はもちろんあったが、ベストを尽くすのだという、なにか覚悟のようなものがあったように思う。次第にFさん

を中心として、家族とスタッフに何となく一体感が感じられるようになっていた。

ある日の晩のこと。それまでベッドに横たわり、もがきながら必死に呼吸をしていたFさんが、急に『アイスクリームを食べたい』と、むっくり起き上がった。そして酸素マスクをはずして、家族の介助によりしっかりと食べたのだ。厳しい状況の中、Fさんが見せたその姿は私を驚かせた。まさに最後の力を振り絞り、生の小さな残り火をともしたように思えた。

その数時間後、家族に囲まれながら、Fさんは静かに息を引き取った。私は、Fさんの死とともに虚脱感のようなものを感じていたが、息子さんからの感謝の言葉を受け、“今の自分にできることを精一杯やろう”、という思いが家族の心にも届き、医師として少しでも役に立てたのだと、自分勝手に思い込んでいた。

病院は本来、治療の場であるから、我々医師は最新の知識・情報・技術をもちながら診療に当たる必要があるし、その努力を惜しんではいけない。しかし、それらを追い求め過ぎるあまり、患者や家族とのコミュニケーションが不十分なまま、結果的に最後を迎えてしまう場合が実に多いように感じる。

医師としてあるべき姿。それはまず、患者や家族とお互いに人間として向き合い、信頼し合うこと。最大限の誠意を持って接し、共に闘うという姿勢を示すこと。どんなに治療が優れていても、そのような姿勢が無いと、本当の意味で癒されたことにはならないのだと感じる。Fさんとの出会いは、今ある私の理念を確立すべく、一つの貴重な経験であった。



（平成14年7月25日 著）